西照

西照寺寺報「さいしょう」 第31号
2013年10月26日
発行　浄土真宗本願寺派　西照寺
高岡市吉久２丁目４－40
郵便振替口座　00780-8-8185　西照寺
西照寺ホームページ　http://nisitera.eek.jp

報恩講勤修

左記のとおり今年度の報恩講お勤めいたします
お参りくださいませ

おつとめの時間

十一月十五日（金）午後二時（逮夜）～
午後七時（初夜）～
十六日（土）午前九時半（満日中）～

布教使　小島信師　射水市堀岡　聞光寺衆徒

※お斎（御膳）は十五日逮夜のみで十六日はありません

西谷山西照寺

正信偈のはなし　第八話

五濁悪時群生海（ごじょくあくじぐんじょうかい）
（五濁悪時の群生海）
応信如来如実言（おうしんにょらいにょじつごん）
（如来如実の言を信ずべし）
能発一念喜愛心（のうほついちねんきあいしん）
（よく一念喜愛の心を発すれば）
不断煩悩得涅槃（ふだんぼんのうとくねはん）
（煩悩を断ぜずして涅槃を得るなり）

末代悪世にある一切の人々は、釈迦如来の真実の言葉を信じるべきである。本願を信じよろこぶ心が起これば、煩悩を断たないままで、涅槃を得ることができる。

（中面に続く）

塞翁が馬

中国の故事に「人間万事塞翁が馬」というのがあります。これは前漢の武帝の頃に編纂された「淮南子」という思想書に書いてあるそうです。

昔、中国北方の城塞(とりで)あたりに一人の翁(老人)が住んでいました。ある日その老人が大切に飼っていた馬が、となりの胡の国に逃げていってしまいました。近所の人たちは、かわいそうにと慰めてくれます。ところが、その老人は「これがどうして福にならないと言えようか」と言います。

それから数か月、逃げた馬が胡の駿馬を引き連れて帰ってきました。皆は「よかった、よかった。財産が増えた」と喜んでくれました。家は栄えていきます。ところが、その老人は「これがどうして禍にならないと言えようか」と言います。変わった老人です。

そんな折、胡の駿馬を調教していたその老人の息子が、落馬して太ももの骨を折ってしまいました。人々はこれを見舞ったのですが、その老人は「これがどうして福にならないと言えようか」と言います。

それから一年がたちました。今度は敵の胡の国が城塞に攻め込んできました。体の丈夫な若者はみんな弓矢をもって戦いましたが、城塞近くの者は十人中九人までも亡くなってしまいました。しかし、この老人の息子だけは、足が不自由で戦にかりだされなかったために親子とも無事であった、という話です。

このことから、人間、元々はジンカンと呼ぶそうでして、人の間つまり世の中というのは、万事すべてが、「塞翁が馬」のようなものである。何が福になり、禍になるかは分からない。「禍福はあざなえる縄のごとし」ということわざもあるように、福が禍となり、禍が福に変化することは、世の常であり、それを見極めることは困難である。だから、幸福な時もそれは禍の種かもしれないから、驕ってはいけない。また、禍で不幸な時もそれは幸福の種かもしれないから、そんなに深刻になる必要もない。もっと鷹揚に構えて、目先の禍福に一喜一憂せず、長期的な展望に立つことが大切だと教えてくれている人生訓のようです。座右の銘にしている人も多いと聞きました。私も好きな言葉です。

ですが、この言葉を思い出すごとに、何か別のことを考えさせてくれる課題を背負っているような気がします。

それは、私の見方によっては、それが禍に見えたり、福に見えたりすることはないのだろうか。何を禍とし、何を福としているのかという私の価値基準の問題です。

これから出会っていくことは、禍になるか福になるか分からない。確かにそうだと思います。しかし、もっと深いところでは、私は何を禍とし何を福としているかという、私のものさしの

問題が深く根本的に横たわっていると思います。

「塞翁が馬」の場合、馬が大切な財産で、それを失うことが禍で、馬が増えることが福である。息子が落馬して怪我をした。病気や怪我をすることが禍で、健康なことが福だという前提があるように思います。

「それは人間にとって当たり前のことで、一体何が問題なのか」と言われそうですが、仏法を聞かせていただくと、どうもそのことが私の問題の本質にあると気づかされてきます。

私のものさし

私は、生まれながらのものと社会から影響されたものさしを持っています。

たとえば、若くて健康なこと、長生きをすることがすばらしい（福）という、ものさしがあります。そうすると、老人になること、病気になること、短命なことはよくないことだ（禍）としか受け取れません。

以前、お寺の掲示板に「生きてよし、死してよし、どこととても御手の真ん中」という標語を掲示していたことがあります。するとそれを見た方が、「生きて良いのは分かるが、何で死んで良いんだ。仏教はそんな変なことを教えているのか」と言っておられるという話を人伝に聞いたことがあります。私たちの常識からすると「生きて良し、死んで悪し」です。ところが、仏教が教えてくれる真実は、生は、良しでも悪しでもない。若いことも、年とることも、健康も、病気も、死もみんなそうである。生老病死という単なる生命現象です。敢えて点数付ければどんな時も皆百点満点です。けれども、私は、若くて、健康なことが良い（福）ことだという執着があるから、老人になることや病気になることが苦（禍）としてしか受け取れない。

本来、これが本当のあるべき私だと執着すべきものは何もない「空」であるということが、仏教の教えているところです。

ヘレン・ケラーは、「障害は不便である。しかし、不幸ではない。」と言いました。確かにそれが真実なんでしょう。ですが、私には、健康で五体満足なことが、幸せなことだというものさしがあるから、障害が不幸としか受け取れないものを抱えています。その私のものさしを取り払えば、今の私のあり方を百点満点に引き受けていける心が開けるはずです。

年をとり、病気になった。「おぞいもんになった。つまらんもんになった」と思い悩む私がいます。しかし、それは真実ではなくて、私がそう勝手に思っているだけなんだと気づかされていくことは、その苦悩を乗り越えていく視点を与えてくれます。

ただ、残念なことに、私自身が私のものさしから解放されることはありません。（裏面に続く）

（中面からの続き）　それが私の幸・不幸を感じる基であり、生きる力の原動力になっているからです。人間を止めなければ、捨てなければ絶対に不可能なことです。

この絶望するしかない私のために、阿弥陀如来は立ち上がってくださった。

仏のものさし

お釈迦さま（釋尊）が、お亡くなりになり涅槃に帰られて、すぐに釈迦は「如来」（真実を悟った方）であるという表現が出てきます。そして、種々のお徳を讃歎する言葉として、「無量」（アミタ）という、計り知れない、限りがないという意味の言葉が使われてきます。やがて、お釈迦さまとその教えの永遠性と普遍性を、寿（永遠性）に限りがない、光（普遍性）に限りがない、と言うようになります。つまり、お釈迦さまとその教えこそ「無量寿」（アミターユス）であり「無量光」（アミターバ）であると讃歎されるようになりました。この無量寿と無量光を合体させた言葉が阿弥陀です。ですから、お釈迦さまとその教えこそ阿弥陀だと讃歎されてきた。後にその阿弥陀の人格的な象徴表現として阿弥陀如来が登場してきた歴史的経緯があったのではないかと思います。

また、後に、釈尊の悟りは肉体上の束縛から解放されていない、余すところのある限界のある「有余涅槃」であり、亡くなってはじめて完全な悟り「無余涅槃」に入られたと理解されるようになります。

この無余涅槃からのはたらきを浄土教では、阿弥陀如来と受け取ってきたように思います。釈尊の永遠性・普遍性を阿弥陀と言った。ですから、釈迦も弥陀も本来同じことなのですが、私が救われて仏になるということからすると、どうしても不完全なものよりも完全な無余涅槃のはたらきを象徴する阿弥陀如来が前面に出できて、釈尊が薄らいできた観が浄土教にはあります。

ともあれ、その阿弥陀如来が、私を救うために本願を建て出現してくださった。

本願とは、すべてのものを救わなければ仏にならないという、仏のものさしです。

煩悩のものさしから解放されることのない私に、本願の仏のものさしに気付けと呼びかけてくださった。

仏教は欲望を無くせという教えではありません。その欲望をどの方向に向けるかです。

如来の呼びかけに耳を傾け、私の欲望が如来の本願の心に生きようとするとき、私のいのちが感動し、私のいのちの意味と目的が明らかになっていきます。

煩悩がそのまま如来の願いによって転ぜられていく。必ず悟りに到ることができる。

そういう道を阿弥陀如来は私のために明らかにしてくださいました。合掌　（文責　住職）